

人文社会学部教員による 学生のための推薦図書等リスト

東京都立大学 人文社会学部

人文社会学部の教員が推薦する図書等のリストです。本学ウェブサイト上の「オープンキャンパス授業」や「ミニ講義」と併せて紹介されていたり、図書に解説が付されているものもありますので適宜ご参照ください。

【人間社会学科】

[社会学教室]

山下祐介 教授

推薦図書：山下祐介 『地域学をはじめよう』 2020年 岩波ジュニア新書

推薦図書：山下祐介 『地域学入門』 2021年 ちくま新書

左古輝人 教授

推薦図書：佐伯啓思 『「欲望」と資本主義—終りなき拡張の論理』 1993年 講談社現代新書

推薦図書：見田宗介 『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来』 1996年 岩波新書

2冊とも、資本主義と社会のかたちや人間心理のあり方との関係を、過去300年にわたり概観した社会科学全般の平易な入門書です。

丹野清人 教授

推薦図書：島藺進 『国家神道と日本人』 2010年 岩波新書

中川薫 教授

推薦図書：高谷清 『重い障害を生きるということ』 2011年 岩波新書

大井慈郎 准教授

推薦図書：藤田弘夫 『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするか』 1993年 中公新書

畑山要介 准教授

推薦図書：小熊英二 『日本社会のしくみ—雇用・教育・福祉の歴史社会学』 2019年 講談社現代新書

[社会人類学教室]

石田慎一郎 教授

推薦図書：鈴木孝夫 『ことばと文化』 1973年 岩波新書

推薦図書：鶴見良行 『バナナと日本人』 1982年 岩波新書

推薦図書：川田順造 『無文字社会の歴史』 2001年 岩波現代文庫

推薦図書：クライスト(手塚富雄訳) 『こわれがめ』 2002年 岩波文庫

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/hss/4313.html>

人類学に必要な不可欠な、三つのアプローチ

人類学的な見地で「法」を観察すると

河野正治 准教授

推薦図書：上橋菜穂子『隣のアボリジニ：小さな町に暮らす先住民』2010年 筑摩書房

児童文学作家として世界的に有名な上橋菜穂子氏は、文化人類学者としてオーストラリア先住民の研究に取り組んできたことでも知られています。本書は彼女のオーストラリア先住民研究の成果を臨場感のある筆致でヴィヴィッドに伝えるのみならず、筆者が見聞きした具体的な事例から、異文化理解とは何か、フィールドワークとは何か、民族や先住民とはどのような存在なのかといった疑問にわかりやすく答えてくれる作品です。これから文化人類学を学ぼうとする人に一読をおすすめします。

河合洋尚 准教授

推薦図書：桑山敬己・島村恭則・鈴木慎一郎『文化人類学と現代民俗学』2019年 風響社

推薦図書：綾部真雄(編)『私と世界：6つのテーマと12の視点』2011年 メディア総合研究所
メディア総合研究所の下記のウェブサイトより、1冊1000円でオンライン注文できます(1冊1,000円)。購入ページ：<https://www.mediasoken.jp/mri-education/contact/>

[社会福祉学教室]

阿部彩 教授

推薦図書：阿部彩『子どもの貧困－日本の不公平を考える』2008年 岩波新書

本書は、日本の子どもの現状について、統計的なデータに基づく客観的なエビデンス(証拠)を提示しながら、解説するものである。貧困の実例やエピソードではなく、データを用いて論じる手法を学ぶ点において、すべての社会科学の学生に手にとって欲しい一書である。2008年刊行といささかデータは古くなっているが、問題の本質は現在でも続いている。

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/hss/13209.html>
「格差」をなくすには、まず「貧困」への意識を変えること

和気純子 教授

推薦図書：直井道子・中野いく子・和気純子編『高齢者福祉の世界』(補訂版) 2014年 有斐閣

本書は、高齢者福祉の入門書として、幅広い領域を含む高齢者福祉の理念、仕組み、方法、課題を記述している。入門書とはいえ、各領域を代表する研究者が執筆し、俯瞰的ながらもわかりやすく概説している。刊行年度はやや古くなっているため、毎年のように改正される制度については、厚生労働省のホームページや厚生労働白書、あるいは内閣府による高齢社会白書等で確認してほしい。

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/hss/14686.html>
高齢者福祉のカギを握る「地域包括ケア」とは？
世界が「高齢化」する中で、日本が果たすべき役割と課題

[心理学教室]

石原正規 教授

推薦図書：椎名健『錯覚の心理学』1995年 講談社現代新書

推薦図書：下條信輔『「意識」とは何だろうか—脳の来歴、知覚の錯誤』1999年 講談社現代新書

推薦図書：一川誠『錯覚学—知覚の謎を解く』2012年 集英社新書

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/hss/6713.html>
「潜在意識」が人間の行動を左右する

実験心理学は、「人間らしさとは何か」を考える学問

大学公式WEB マガジン「メトロノワ」：ゼミ・研究室レポート Vol.1

人の知覚・行動を測定し、「人間らしさ」を解き明かす「知覚行動科学研究室」

<https://metro-noix.tmu.ac.jp/article/0021.html>

https://metro-noix.tmu.ac.jp/assets/files/pdf/metro-noix_article021.pdf

下川昭夫 教授

推薦図書：小此木啓吾 『対象喪失—悲しむということ』 1979年 中公新書

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/hss/15290.html>

課題のある子どもたちを、コミュニティの力で支えよう

「中1ギャップ」を埋めるための、「コミュニティ臨床」とは？

[教育学教室]

杉田真衣 准教授

推薦図書：安田夏菜 『むこう岸』 2018年 講談社

オープンキャンパス模擬授業：いま「大人になる」とはどういうことか

<https://ocw.tmu.ac.jp/courses/35/119>

<https://ocw.tmu.ac.jp/courses/35/119?num=1>

<https://ocw.tmu.ac.jp/courses/35/119?num=2>

河合隆平 准教授

推薦図書：赤木和重 『子育てのノロイをはぐしましゅう—発達障害の子どもに学ぶ』 2021年 日本評論社
著者は、発達障害を研究する発達心理学者。発達障害のある子ども・青年の視点から、子育てや保育・教育の「当たり前」を揺さぶり、著者自身の子育て経験も織り交ぜながら、発達と教育の関係を問い直す1冊。平易でユーモアあふれる筆致のなかに、発達・教育研究の理論課題がちりばめられている。

推薦図書：大門正克 『増補版：民衆の教育経験—戦前・戦中の子どもたち』 2019年 岩波現代文庫
著者は「生存」の歴史学を提唱する日本近現代史家であり、戦前・戦中の子どもたちがどのように生きたのか、都市と農村で異なる「教育経験」を子どもたちがその生活や人生においてどのように受けとめたのかを、子どもの綴方（作文）等を読解しながら描き出している。その範囲は、占領地や障害のある子どもたちにも及ぶ。

[言語科学教室]

原田なをみ 教授

推薦図書[1]：ノーム・チョムスキー 『統辞理論の諸相』 2017年 岩波文庫（原著は1965/1975年刊）

推薦図書[2]：ノーム・チョムスキー 『統辞構造論』 2014年 岩波文庫（原著は1957年刊）

推薦図書[3]：ノーム・チョムスキー著 福井直樹・辻子美穂子編訳

『ノーム・チョムスキー 我々はどのような生き物なのか 言語と政治をめぐる二講演』

2023年 岩波現代文庫

推薦図書[4]：マーク・C・ベイカー著 郡司隆男訳

『言語のレシピ — 多様性にひそむ普遍性をもとめて』 2010年 岩波現代文庫

（原著は2001年刊）

東京都立大学の人文社会学部では、言語学と脳科学が一つの専攻として位置付けられています。それはたまたまなのか、意味があつてのことなのか。その問いに答えてくれるのがここで紹介する4冊の本です。どれも岩波書店のHP内に目次などの情報があるので、そちらも参照してみてください。

理論言語学（生成文法理論）は伝統的な言語学・数学・哲学・心理学・生物学などの諸分野を融合させ、私たちが無意識のうちに身につけている母国語の知識はどこに由来するのかを考える学問です。その礎を築いたノーム・チョムスキーの初期の著作が[1][2]です。どちらも理論言語学の理念・目

標や、研究を進める上での心構えなどが記されています。少々難しいかもしれませんが、訳者の福井直樹先生の解説が心強い味方になってくれます。[2]は横書きということからもわかるように、もう少し具体的な手続きにも触れていて、形式言語理論に興味がある・数学的なアプローチも大丈夫、という人によりお勧めです。

[3]はチョムスキーが2014年に上智大学で行った講演と、その時に行われたインタビューがまとめられています。実はチョムスキーは理論言語学だけでなく、政治学にも非常に深く関わっていて、その言語学の著作の中にも政治に関する章が含まれていることが往々にしてあるぐらいです。なぜ「言語学」と「政治」なのか？疑問に思ったらぜひ手に取って読んでみてください。

[4]はあいにく品切れなのですが、ヒトという種に普遍的に存在する、私たちの頭の中の母国語の知識(母国語の「もと」)が、個別言語に変遷する過程を「パンのレシピ」になぞらえ、チョムスキーの著作よりもっと多くの具体的な言語事象にふれながら「自然言語を科学的に研究する」とはどういうことなのかをわかりやすく説明したものです。(ちなみに原著 Baker (2001) The Atoms of Language – The Mind's Hidden Rules of Grammar (Basic Books) は今でも入手可能です。)また、岩波書店のHP内の本書の「編集部からのメッセージ」も、興味を持った人はぜひ見てみてください。

保前文高 教授

推薦図書：ゲアリー・マーカス著 大隅典子訳 『心を生みだす遺伝子』 2010年 岩波現代文庫

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/hss/4311.html>

赤ちゃんの脳から、言葉の獲得への道筋を考える

人が言葉を発する直前の脳の働きを解明する

[日本語教育学教室]

浅川哲也 教授

推薦図書：浅川 哲也 『知らなかった!日本語の歴史』 2011年 東京書籍

日本語が世界の中の言語として、いかに位置づけられる言語であるかについて解説する。日本語の音声学と音韻論について日本史の時代別に解説する。『万葉集』『源氏物語』『天草版伊曾保物語』などの資料が、当時、実際にどのような発音で読まれていたかを実証的に復原し、古代日本語の音韻が、どのような形で、今なお、現代日本語の音韻と表記(現代仮名遣い)に影響を与え続けているかを豊富な資料を使って検討する。また、日本語の歴史的な変化が、現代日本語に多くの問題をもたらしている事実を指摘し、日本語の誤用問題とどのように向き合うべきかについて考察する。

【人文学科】

[哲学(哲学・西洋古典学)教室]

栗原裕次 教授

推薦図書：プラトン『ソクラテスの弁明』2012年 光文社古典新訳文庫

紀元前399年にギリシア・アテネの哲学者ソクラテスは、新しい神を導入し若者を墮落させた罪で訴えられ、死刑判決を受けました。本書は、ソクラテスの弟子のプラトンがその裁判の様子を描いたものです。裁判の中でソクラテスは無罪を主張しますが、そのポイントは「自分は哲学をしただけだ」というものです。哲学者として生きたがために死刑にされるとはどういうことか。哲学とは何なのか。読者はソクラテスの生と死の狭間で哲学の本質と出会うことでしょう。

推薦図書：プラトン著 中澤務訳『饗宴』2013年 光文社古典新訳文庫

恋とは何か？なぜ私たちは愛し合うのか？古代ギリシアの哲学者プラトンは、その時代の有名人たちがエロス(恋の神)について賞讃する作品を著しました。ソクラテスはエロスが「神」であることを否定し、神と人間を繋ぐ中間者と説明します。自分が永遠に幸福であることを願う力、つまり〈哲学〉だと誉め讃えるのです。哲学に興味をもつみんなに読んでもらいたい傑作です。

推薦図書：伊藤邦武他(編)『世界哲学史Ⅰ』2020年 ちくま新書

本書は別冊も含めて9巻からなる『世界哲学史』シリーズの最初の巻です。本シリーズは、古代ギリシアに起源をもつ哲学を、世界全体の中で捉え直して、歴史的に関連づけながら総合的に理解しようと挑みます。地球上の各地で、世界に対する驚きや人間の不思議さが知的好奇心を呼び醒まし、大切なことについて純粋に知ることを愛し求めるようになった「始まり」が、各執筆者の観点から丁寧に説明されています。大学の知とは何かを考える手引きとなるでしょう。

吉田俊一郎 准教授

推薦図書：小林標『ラテン語の世界 ローマが残した無限の遺産』2006年 中公新書

私たちの生きる現代の社会は(良くも悪くも)ヨーロッパで形成されてきた文化に強い影響を受けています。その文化の根源をたどっていくと、そこには古代ローマという大きな源泉があり、そこで用いられていた言語がラテン語です。本書はこのラテン語がどんな言語で、どんな歴史を持っているかを紹介しています。歴史や言語に関心のある方たちだけでなく、現代社会を深く理解しようと望む多くの方たちに読んで頂きたいと思います。

増山浩人 准教授

推薦図書：カント著 宇都宮芳明訳『永遠平和のために』1985年 岩波文庫

18世紀のヨーロッパでは多くの戦争・紛争が起こっていました。この状況を嘆いたカントは、本書において、自らの哲学を総動員して、平和を実現するために我々がなすべきことを考察しました。その中には「常備軍の廃止」や「国連の設立」など後世に大きな影響を与えたものも少なくありません。世界各地で戦争が起こっている今こそ、改めて読んでもらいたい一冊です。

推薦図書：マイケル・サンデル著 鬼澤忍訳『実力も運のうち 能力主義は正義か?』2023年

ハヤカワ文庫NF

本書で、サンデルは「大学入試に合格した人は高く評価されるべきである」という考え方を明確に否定します。さらに、サンデルは、高学歴エリートが大学に行けなかった人を見下すことによって社会に分断が生まれてしまった、と主張します。この主張をサンデルは神の恩寵に関する哲学史考察や20世紀の政治哲学に関する考察によって裏付けています。本書はみなさんにとって身近なテーマの哲学入門書と言えるでしょう。

[歴史学・考古学教室]

鎌倉佐保 教授

推薦図書：五味文彦『中世のことばと絵—絵巻は訴える—』1990年 中公新書

本書の題材は、『絵師草紙』という絵師を主人公とした中世の絵巻である。これは誰が、いつ、どのような目的で作成したのか。著者はまず、主人公の絵師が手に持つ一通の文書に注目し、絵を読み解きながら絵師を取り巻く状況や絵巻作成の目的などを次々に明らかにし、さまざまな史料を用いて詞書きの執筆者や当時の社会の様相を明らかにしていく。絵巻が描かれたのは鎌倉末期、後醍醐天皇の時代であった。絵画や文学作品を用いた分析はベテラン研究者ならではの、歴史学の方法というものを本書は教えてくれる。

推薦図書：工藤敬一『荘園の人々』2022年 ちくま学芸文庫

荘園は難解で苦手だという人も多いだろう。古代～中世社会において人々の生活の場であり、皇族・貴族、寺社、武士の生活を支える経済基盤でもあった荘園を知ることは、日本の歴史を把握するうえでも重要である。本書は、荘園に生きた人物に焦点をあてて、人物を通じて荘園の実相が浮かび上がらせるものである。この本の初版は1978年であるが、荘園に生きた人々や、荘園の姿を豊かに描き出した名著として最近文庫本として再刊された。本書を通じて、荘園について理解を深め、荘園の魅力に気づいていただければと思う。

前田弘毅 教授

推薦図書：チャールズ・キング（前田弘毅監訳）『黒海の歴史』2017年 明石書店

有史以来、文明と野蛮の物語が交錯する舞台となってきた「黒海」。民族、国民、そして歴史をめぐるそのリアリティをえぐり、モンゴルから、地中海世界までも視野に入れ、ユーラシアの諸政体がぶつかり合う地政学上の要衝・環黒海地域の複雑なダイナミズムを本書は描き出す。謎に満ちた誕生時から陸域と海域世界をつなぐ小宇宙としての黒海の歴史は、さまざまな逆説に満ちた世界であり、万華鏡のように人類史を鮮やかに浮かび上がらせる。

大貫俊夫 准教授

推薦図書：ウィンストン・ブラック（大貫俊夫監訳）『中世ヨーロッパ ファクトとフィクション』2021年 平凡社

本書は「中世は暗黒時代だった」「中世の人々は地球は平らだと思っていた」「中世の教会は科学を抑圧していた」など11のフィクションをとりあげ、それぞれについて、フィクションの成り立ちとそれを支える史料的根拠、実際に起きたこととそれを支える史料的根拠を提示する。「暗黒の中世」史観の成り立ちを学説史として把握しつつ、史料を検討して事実として言えるのはここまで、と線引きを行うことはまさに歴史学の醍醐味。本書でその意義と愉悅を堪能できるだろう。

推薦図書：阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』1988年 ちくま文庫

グリム童話の「ハーメルンの笛吹き男」は、13世紀のドイツの一都市で実際に起こった出来事に基づいている。本書は、多くの謎をはらむこの事件に接近することで、中世都市の経済・社会、東方植民運動、子供十字軍、被差別民、貧困などの問題に深く立ち入る。

高橋亮介 准教授

推薦図書：本村凌二『古代ポンペイの日常生活』2022年 祥伝社新書（講談社学術文庫版、2010年）

紀元79年、ローマ帝国の支配下で繁栄を謳歌するイタリアの地方都市ポンペイはウェスヴィオ山の噴火により埋没し、火山灰の下には当時の日常の痕跡がタイムカプセルのように残されました。本書は、ポンペイに残された無数の落書きを読み解きながら、選挙のあり方、剣闘士競技というユニークな

見世物、恋する人たちの率直な感情の発露、そして文字を学び使うことの意味といった様々なテーマを扱いながら古代ローマの生活に迫ります。

推薦図書：ピーター・パーソンズ(高橋亮介訳)『パピルスが語る古代都市：ローマ支配下エジプトのギリシア人』2022年 知泉書館

エジプトの乾燥した気候はパピルス紙に書かれた古代の文書を多く残しました。アレクサンドロス大王の東方遠征(紀元前4世紀)からイスラーム勢力の台頭(紀元後7世紀)までのエジプトではギリシア語が用いられ、そこに暮らす人たちは、行政とのやり取り、農業や商業の契約を書き記し、ホメロスやエウリピデスといった古典文学に親しみ、新興宗教であるキリスト教の『聖書』を紐解きました。本書では古代ローマ時代のエジプトの一都市オクシリノスのゴミ捨て場から見つかったパピルス文書を使って、エジプト、ギリシア、ローマといった異なる古代文明が交錯する世界を蘇らせます。

[表象文化論教室]

福田貴成 教授

推薦図書：門林岳史・増田展大編『クリティカル・ワード メディア論--理論と歴史からくいま>が学べる』2021年 フィルムアート社

テレビ番組からSNS上の多様なコンテンツに至るまで、身のまわりの表象文化について考えるとき、その経験を支えるメディアの存在を無視することはできません。そのメディアなるものを思想的な対象として扱う学問分野がメディア論です。この著作は、メディア論のはじまりから最新動向まで幅広くおさえた入門書です。さまざまな今日的イシューとメディアの関連を論じる「理論編」、メディア論の系譜をたどる「系譜編」、メディア技術の来歴を訪ねる「歴史編」の三部構成。ぜひ興味の湧いた項目から目を通してみてください。

古永真一 准教授

推薦図書：ジョルジュ・バタイユ(酒井健訳)『エロティシズム』2004年 ちくま学芸文庫

推薦図書：ジークムント・フロイト(中山元訳)『エロス論集』1997年 ちくま学芸文庫

表象文化論教室では、作品を読み解く理論を学ぶ一環として、精神分析の授業を開講しています。精神分析といえばフロイトです。「去勢コンプレックス」や「男根期」といったおどろおどろしい用語には抵抗を覚えるかもしれませんが、この本には、訳者のわかりやすい解説もついており、エロスと社会に関するフロイトのユニークな思想に触れることができます。

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/humanities/11715.html>

「男らしさ」って何だろう? 「自分らしさ」って何だろう?

こんなにも違う! 「戦争」の描かれ方

[日本文化論教室]

大島資生 教授

推薦図書：窪園晴夫『数字とことばの不思議な話』2011年 岩波ジュニア新書

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/humanities/4312.html>

私たちは日本語のきまりや仕組みをすでに知っている

実例で読み解く日本語文法のおもしろさ

[中国文化論教室]

佐々木睦 教授

推薦図書：杉原たく哉『アジア図像探検』2020年 集広舎

推薦図書：武田雅也『中国のマンガ(連環画)の世界』2017年 平凡社

推薦図書：武田雅也『西遊記:妖怪たちのカーニヴァル』2019年 慶應義塾大学出版会

ミニ講義: <https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/humanities/13303.html>

児童雑誌から垣間見える、中国社会の移り変わり

マンガやアニメの中に流れる中国人の精神

荒木典子 教授

推薦図書: 今野真二 『振り仮名の歴史』 2009年 集英社新書

ミニ講義: <https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/humanities/4728.html>

昔の日本人は、中国から伝わった書物をどうやって読んだのか?

現代中国語の知識だけでは読めない、中国の「白話小説」とは?

[英語圏文化論教室]

中村英男 教授

推薦図書: チャールズ・ディケンズ(佐々木徹訳) 『大いなる遺産』 (上・下) 2011年 河出文庫

紳士になりたい。イギリス19世紀はそういう欲望が渦巻く世界でした。姉に虐待されながら育ったピップは、匿名の人物から紳士になる費用の申し出を受けます。姉の虐待から守ってくれていた優しい義理の兄を見捨てるようにして、紳士になることを夢見てロンドンへと向うピップ。イギリス人が共有する精神世界が描かれている作品です。なお dickens great expectations text などと検索すると原文を読むことができます。

安井マイケル 准教授

推薦図書: スコット・フィッツジェラルド(村上春樹訳) 『グレート・ギャツビー』 2006年 中央公論新社

ミニ講義: <https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/humanities/7809.html>

文学は「まねること」から生まれる!?

欧米文学を学ぶことは「生きる力」にもなる

[ドイツ語圏文化論教室]

Leopold Schlöndorff 教授

推薦図書: E.T.A. Hoffmann 『The Sandman』 1816年

“The Sandman” is the story of Nathaniel and his life-long struggles with reality and imagination, rooted in childhood trauma caused by the fairytale-like, mythical character of “Sandman” who was responsible for the death of his father. “The Sandman” substitutes the lost parent as a moral and punitive authority and grows out to the imagination of a vengeful father by (seemingly) sabotaging Nathaniel’s quest for love and meaning in life.

“The Sandman” was published as the first of eight stories of *Nachtstücke* (“night works”) in 1816, a collection of eight works dedicated to the dark side of human’s mind. Furthermore, we recommend reading Freud’s essay *The Uncanny* (1919) as a tool of interpretation.

1) E.T.A. Hoffmann: *The Sandman*. Transl. by Peter Wortsman. London (Penguin) 2016.

Full Text: <https://www.ucl.ac.uk/~rlbeebe/sandman.pdf>

E. T. A. ホフマン 『砂男』(光文社古典新訳文庫 『砂男/クレスペル顧問官』、岩波文庫 『ホフマン短篇集』等に所収)

2) Sigmund Freud: *The Uncanny*. Transl. by David McIntock, Hugh Houghton. London (Penguin) 2003.

福岡麻子 准教授

推薦図書：多和田葉子『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』2012年 岩波現代文庫

多和田葉子はドイツに住み、日本語とドイツ語の両方で創作する作家です。しかし、このエッセイ集は、「だから日本語（母語）とドイツ語（その外）の話」というわけではありません。むしろ、母語の「外」はイコール「外国語」では必ずしもないこと、母語で書くことそれ自体が「母語の外」を持ちうることに気づかされ、雲が晴れるような爽快感を得られるエッセイ集です。

推薦図書：姫岡とし子『ジェンダー史10講』2024年 岩波新書

ドイツ・ジェンダー史のパイオニアによる、女性史・ジェンダー史の入門書。暗黙のうちに「標準」として想定されているのは男性、男性「ではない」ジェンダーは「女流…」のように「特殊」なものとして扱われる、このような事態について考えるのにもさまざまな示唆があるでしょう。

金志成 准教授

推薦図書：須賀しのぶ『革命前夜』2018年 文春文庫

東ドイツの名門音楽大学が舞台の歴史エンターテインメント小説。一流演奏家たちの切磋琢磨、監視国家の緊張感、そして歴史的な大変革を背景にしたミステリーが、日本人留学生の目線で描かれる。壁崩壊直前の東ドイツの雰囲気を知るためにも格好の入門書。

推薦図書：フランツ・カフカ『変身』2022年 角川文庫ほか

プラハ生まれのユダヤ系ドイツ語作家フランツ・カフカの代表作。

推薦図書：ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』1951年 新潮文庫ほか

ノーベル文学賞受賞作家ヘルマン・ヘッセの数ある青春小説の一作。

[フランス語圏文化論教室]

西山雄二 教授

推薦図書：西山雄二編『いま言葉で息をするために ウイルス時代の人文知』2021年 勁草書房

ヨーロッパの人文学者たちはコロナ時代をいかに経験したのか。哲学・文学・歴史・人類学・宗教の観点からコロナ禍を考える論集。

推薦図書：坂本尚志『バカロレア幸福論 フランスの高校生に学ぶ哲学的思考のレッスン』2018年 星海社新書

フランスの高校で哲学は必修科目で、大学入学試験にも出題される。哲学の授業を通じて、フランスの高校生たちは思考の型をいかに習得していくのか。

ミニ講義：<https://www.tmu.ac.jp/cooperation/tmunavi/index/hum/humanities/15306.html>

フランスの社会・文化から学ぶ

フランスにおける「哲学」～大学入試と「哲学する」授業～